

# 学びの風便り

リーディングスクール通信34 R6.12.23

発行：松本市教育委員会 教育研修センター

## 特集！学びの改革のあゆみ 菅野中学校・清水中学校

### 菅野中学校 「協働の学び」づくりに挑戦する1年目の歩み

今年度、「リーディングスクール・アソシエイト校」として、学校づくりに踏み出した菅野中学校では「協働」を学びのテーマとして生徒たちと共有し、豊かな対話をベースとした授業・活動を通して、思考力・表現力や互いの関係性が高まる学びの実践を目指してきました。

#### 「コの字型の座席」による授業づくりへの挑戦



この11月、生徒たちが日常的に「思い・考え」を伝え合う環境づくりを目指し、全校で「コの字型の座席配置」を実施し、それを活かした協働的な学びづくりに挑戦することに踏み出しました。

「コの字型の座席配置」は生徒たちが互いの顔が見えやすく、相互のコミュニケーションがとりやすいことから、子どもたちが主体的に進める授業を実施しやすいというメリットがあります。一方で、これまで、特に中学校では日常的な教室レイアウトとして取り入れ

てきた学校は少なく、初めて経験する先生たちがほとんどであることから、菅野中学校の先生方としては大きな挑戦となりました。

実施に先立って、先生たちがその意義を協議・共有し、さらに全校集会で校長先生から提案、生徒たちとも「コの字型」での学びの意味・目的を共有するなど、準備を重ねました。



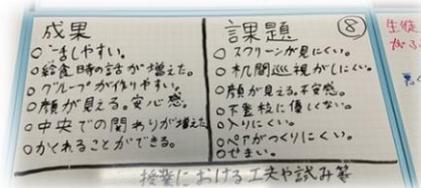
#### 成果と課題を確かめ合い、みんなで一歩ずつ

実施後、「授業で向かい合っているのでみんなの顔や授業中の反応・動きがよく見えて、自分にとってはこの席の方がいいと思った」といった生徒の感想や、「子どもが『ぜひ見に来て』というので、参観しました。子どもたちがかかわりあって学んでいてよかったです」という保護者のアンケートなど、前向きなフィードバックを得ることができました。



そして、12月、「コの字型の座席配置」で授業をしてみた手応えや課題を先生たちが振り返り、交流する機会を持ちました。

4人ほどのグループで、「コの字型の座席配置」で感じた「成果」と「課題」を出し合い、ホワイトボードにまとめていきます。各グループでは和やかな雰囲気の中、率直な対話が行われました。



#### 先生たちが振り返った 「成果」

生徒同士のやり取りが活発になった  
自然に隣と会話が生まれる  
子どもの様子が見やすく状態をとらえやすい  
距離が縮まって雰囲気が変わった  
反応がよい。話を聴くことができる。  
...

#### 「課題」 (ともに一部抜粋)

おしゃべり、わちゃわちゃになりやすい  
生徒にとってスクリーンが見にくい  
個人で進めるときはやりにくさがある  
活動によっては不便さを感じる  
最前列の席が多く抵抗感がある生徒もいる  
...

話し合いの後、各グループで出された内容を共有し、次回は様々な課題を克服し、「コの字型」のよさを活かす工夫をみんなで出し合おう、と確認されました。

あらたな取組に挑戦する時には「戸惑い」「困難さ」に直面するもの。それを率直に語り合い、みんなで課題を乗り越えていこうとする先生たちの「協働の学び」がここにはあります。

先生たちと生徒たち、みんなで一歩ずつ「協働の学び」を創っていく菅野中学校です。

## 清水中学校 「すべての活動」を通じた表現力の育成

全校研究テーマ「表現力が育つ～すべての活動を通して～」の具現に向けた2学期の取組みの一部を紹介します。

### 全教科等での表現力の質的な高まり

今年度は全教科等で指導主事等を講師に招いての研究授業が行われました。先日参観した国語の授業では、言葉による見方・考え方を働かせ、経験や思いを表現する言葉をゆたかにしていく生徒の姿が見られました。平家物語（扇の的）の登場人物（那須与一、源義経、平敦盛）を題材にした単元「我の押しは誰ぞ？」の「自分と推しの生き方には、どのような関係があるのだろうか」を考える場面（全8時間中第7時）でした。



生徒は他者の考えを参照したり、情報を整理・分析できるように構成されたワークシートに書き込んだりしながら、自分の判断の根拠を明確にしていきました。那須与一を推すある生徒は、「緊張する場面でも何事にも動じないでやりきるところが与一を推す理由だ。バレーボールの試合で相手がセットポイントのとき、自分たちはミスしたら負けてしまう状況で、自分たちのチームが連続得点をして一気に大逆転したことがあった。だから、自分の生き方との関係は『完遂』という言葉で表したい。」と伝えていま

した。この単元について住吉先生は、「国語の授業では経験や思いをどのように表現するか、という言葉を通じた表現やそこで用いられる言葉そのものを学習対象にしている。対象と言葉との関係を問い直していく単元づくりをしたことが、表現力が高まった姿につながったと思う。生徒が考えたくなる・伝え合いたくなる単元を貫く問いの設定は、もちろん大事にした。」と振り返っていました。

### 教師の学びが子どもの学びにつながっていく

2学期のある日の生徒会の時間、「意欲的に参加したいと思える常時活動について考えよう」をテーマにした話合いの場面で、委員長のA生は意見の収束を委員に投げかけたものの、委員の生徒達は少し困ったような顔をして沈黙が続きました。委員の困り感をとらえたA生は、数人で意見交換する場を提案するとともに、教室全体を見まわし、意見交換が進まないグループに入り、柔らかな表情でオープン・クエスチョンをしながら、話合いを支えていました。A生はインタビューに対し、「もともと数人で話し合うことは想定していなかった。でも、みんなの様子を見て、そうした方がいいと思った。普段の授業で松澤先生がグループに入って進めていることを参考にした。」とふりかえっていました。生徒の話合いをファシリテートする教師の姿がロールモデルとなり、生徒が生徒の話合いをファシリテートする姿でした。



「こうした生徒の姿の背景には、校外研修で学んだことが校内で共有されていく職員風土がある。ホワイトボードミーティングやラウンド・スタディなどの共有がその例として挙げられる」と内川教頭先生が語られました。この背景の一例として、牧野先生と湯澤先生、そして研究主任の坂本先生の取組みを紹介します。3名の先生方は、教育研修センター主催の「達人に学ぶ！『子どもが主人公』の学級づくりセミナー」に参加し、岩瀬直樹先生（軽井沢風越学園）から、ホワイトボードミーティングの体感を通し、子どもたちが安心できる仲間づくりの「技」と「マインド」を学びました。さらに、ちよんせいこ先生（「ファシリテーション力向上研修」講師）の著書を輪読し、発散・収束・活用を意識したファシリテーションへの理解を深めました。そうするなかで、生徒会活動の充実のためには生徒自身が話合いをファシリテートし合意形成していくことが必要だという課題意識が職員間で共有され、特設授業として2、3年生の生徒にファシリテーション講座を実施したそうです。この特設授業からしばらくした日に、上述のA生の姿があったわけです。教師の学びが生徒の学びにつながっていった、リーディングスクール2年目の清水中学校ならではの事例です。



このようにして、すべての活動を通して「表現力が育つ」学校づくりを進めている清水中学校。今後はこれまで以上にICTを活用し、思考ツール等によって整理・分析したり、他者参照しながら考えを広めたり深めたりするなかで、表現力を育てていくとのことです。